文化に造詣の深い家系なのだ。『村誌』を読むと、お二人とも山口弥一郎氏の良き案内人であり、良きパートナーであったことがうかがえる。

平成一〇年五月一九日、私たちは早速、扇頭ともいうべき佐賀瀬川部落に集結した。ここからまずは佐賀瀬川上流の大谷地溜池まで登り詰め、そこから川沿いに市野―上平―二岐―仏沢―松坂―佐賀瀬川―長尾と下る行程をとった。

市野で柳津町軽井沢に至る県道会津高田―柳津線と分岐し、左に急角度でうねる山道に入ると、そこからはほぼ深山幽谷の世界になる。左下に断崖を見下ろしながらの慎重な運転になるが、想像していたような悪路ではなかった。私たちは、大正九年(一九二〇)生まれで七八歳になり、今年に入ってから少々体調を崩されたという唐澤さんを心配したが、そんな気配はどこ吹く風、子供のように眼を輝かせている。これは足で稼ぐ実学の人に共通することだが、どうやらフィールドワークとなれば体中にアドレナリンが分泌される仕組みになっているのかもしれない。

目指す大谷地溜池は山腹を領して静まり返っていた。時折、初夏の風が水面を皺立たせるが、あとはハルゼミの声が断続的に渡り来るばかりである。ここに七戸の部落が眠ることを誰が知ろう。傍らに水神供養碑がなければこれが人工の築堤池とは思われないほど自然と一体化している。

大谷地溜池は、「水源涸渇して寛政年間の頃より、非常に用水欠乏し、故に検地の派遣を請へ、灌漑配水を執行せし事、往々之有りしが、累年田地旱害に罹るもの夥しく、水下一般困難を極む」(山口佐五郎編纂『大谷地溜池沿革』)といった理由で、文化六年(一八〇九)に着工し、丸九年をかけ一四年に竣功している。

この水没第一号となった大谷地には、越後の須田氏の子孫、あるいは上杉景勝の家来で梁川の須田城主の子孫と伝えられる須田家があった。そして唐澤さんの指さす方面を見て驚いた。谷間にお椀を伏せたようにひときわ目立つ山に、安土桃山時代に須田大炊守が住んだ山城、龍ケ嶽城があったというのだ。何のいわれあってこの山懐奥の、しかも険しい山に軍備しなければならなかったのか、今となっては知る由もない。

写真上――ひっそりと静まり返った大谷地溜池
写真右――草におおわれた水神供養碑
写真下――龍ケ嶽城址。まさに龍でなければ昇れないと思われるほどの険しい山に城があった